



[図 32] 差動出力ハイパワー IVC の出力電力対歪率特性

シーで製作したシステムでこそ比較試聴の意味がある。それぞれのデバイスの音楽表現力の特徴を感じ取るうえで貴重な試聴会であった。

今年の6月に東京で開催された OTOTEN では、少々改良した状態の本機を、やはり3ウェイマルチアンプシステムの高音、中音パワー IVC に使用した。当日は純半導体パワー IVC と Nutube ハイブリッドパワー IVC の比較がメインテーマになった。

2回の試聴会を通して、本機の音楽表現力の特徴が多くの人に感じ取ってもらえたと思う。

本機の特徴だが、第一印象は呆れるほど多くの音が聴こえることだ。大編成のオーケストラでは個々の楽器の動きが克明に表現され、音楽の複雑さと奥深さがありありと表現される。本機の音の透明度が高く、楽音の倍音を鮮明に鳴らすために、楽音をリアルに再現するのである。

本機の音楽表現は、真空管ともハイブリッドとも異なる楽音のしなやかさ、艶やかさを表現する。

本機は衝撃音の表現も得意だ。パーカッションの動きが鮮やかで、リズム感が実に良い。多数の楽器が重なるところほど威力を発揮する。試聴会ではいろいろな曲をかけるが、アンプの進化の過程を感じてもらうために、決まった曲もかけている。特にストラヴィンスキー「火の鳥」は表現力の尺度になるだろう。時間の限られている OTOTEN で、ついつい最後まで聴いてしまった。それほど惹きつける音楽が多かった。特に表情の変化が大きく、世界が変わっていくストーリーがリアルに表現されている。

本機はスピーカー制御力が大きく、比較的小さなウーファーでも圧倒的なティンパニとバスドラムの風圧を発生させる。余韻が美しく減衰していくのも、スピーカー制御力が強い証拠だ。

試聴会では必ず次のテーマが生まれてくる。いかにして次の目標に達するか、道筋が見えてくることもある。試聴会はシステムの進化を加速している。